

静脩

1991年1月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 27, No.3

大惣本目録刊行によせて

文学部教授 日 野 龍 夫

京都大学附属図書館が1988年2月に第1分冊を刊行した『京都大学蔵大惣^{だいそうほん}本目録』が、1990年3月刊の第3分冊をもって完結した。その中には西鶴の『世間胸算用』や上田秋成の『雨月物語』などの重要な作品が含まれているが、ここでは、含まれている個々の書物ではなく、この目録自体の有する意義について考えてみたい。

大惣とは、江戸中期から明治32年頃まで名古屋で営業していた貸本屋、大野屋惣八の略称である。貸本屋は、あらかたの顧客が読んでしまって借り手のなくなった本を他の貸本屋へ転売しては、新しい本を仕入れ、蔵書を次々入れ換えるのが普通であるが、大惣には仕入れた本は転売しないという方針があったので、蔵書は増える一方で、江戸後期には全国一の規模の貸本屋となっていた。

その大惣が、明治31年頃に、膨大な蔵書を売却して廃業するという事になった。以後、売却の話が具体化して、翌32年4月に蔵書のうちの約3700部が京都帝大附属図書館に買い上げられるに至るまでの経緯については、本学法学部整理掛長の広庭基介氏に「京大『大惣本』購入事情の考察」（『大学図書館研究』第24号所載）というすぐれた研究がある。また廃業直前の頃に大惣が制作し

た自家の蔵書の目録が『大野屋惣兵衛蔵書目録』という書名で（惣八を惣兵衛と誤る）、早稲田大学図書館に蔵されており、同館の司書をしておられた柴田光彦氏の『大惣蔵書目録と研究』（青裳堂書店刊）に翻刻されている。

これら先学の研究で明らかになったところを簡単に要約すると、廃業時の大惣の蔵書は17000部弱であったが、そのほとんどは帝国図書館（現在の国会図書館）・東京帝大・京都帝大・高等師範学校（現在の筑波大学）に買い上げられた。うち、帝国図書館に入った約3500部、京都帝大に入った約3700部、高等師範学校に入った約500部は現存するが、東京帝大に入った分は、歌舞伎台帳・浄瑠璃本約1100部を残して、納入時の帳簿類もろとも関東大震災で焼失してしまったため、総部数も個々の書名も知られない。結果として、京大附属図書館は旧大惣本の今日における最大の所蔵者となった。

京大附属図書館における大惣本は、大惣本としてまとまって配架されているわけではなく、書物の内容に応じてそれぞれの属する分類のところにバラバラに収められている。しかし幸いなことに、明治32年の納入当時に納入業者（東京の書肆青山

堂)が作ったリストである『^{大惣}図書目録』が現在も附属図書館に保管されているので、大惣本の書名は容易に知ることができる。『^{大惣}図書目録』の分類・配列に従って書物の書誌を略記し、書名索引と、附属図書館の分類番号による索引を付したのが、このたびの『京都大学蔵大惣本目録』である。

貸本屋という業態は今日でも存在するが、それが文化の中に占める位置は、近世と今日とはまったく異なる。生活水準に比して書物の値段が相対的に高く、書物を買うことが今日ほど簡単にはできなかった近世において、職業的学者や一部の書物好きを除き、普通の人にとって、書物とはまずもって貸本屋から借りて読むものであった。近世後期の小説のうちでも値段の高かった読本は、よく売れた曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』などでも発行部数は1000部弱であったが、この数字は、当時の江戸の貸本屋数約800と、大坂の貸本屋へ送られた分200部弱とに見合っているという。

人々の生活の中にはいりこみ、教養ないし知的娯楽への欲求に応えたという点で、近世の貸本屋は恐らく今日の公共図書館よりも大きな役割を果たした。明治中期頃までは確かに続いたその役割は、明治の文学者の少年時の回顧談などにしばしば語られている。森鷗外の史伝『細木香以』の冒頭に次のようにいう。「わたくしは少年の時、貸本屋の本を耽読した。貸本屋が^{おい}笈の如くに^{かさ}積み重ねた本を背負って歩く時代の事である。其本は読本、^{かきほん}書本、人情本の三種を主としてゐた。読本は京伝、馬琴の諸作、人情本は春水、金水の諸作の類で、書本は今謂ふ講釈種である。さう云ふ本を読み尽して、さて貸本屋に「何かまだ読まない本は無いか」と問ふと、貸本屋は随筆類を推薦する。これを読んで伊勢貞丈の故実の書等に及べば、大抵貸本文学卒業と云ふことになる。わたくしは此卒業者になった」。

坪内逍遙は、少年時代を名古屋の郊外で過ごした人であったから、ほかならぬ大惣へ盛んに入りして近世の小説に親しんだ。『小説神髓』にはその体験が様々な形で反映している。我々の手にする京大蔵の大惣本の中には、かつて坪内雄蔵少

年が読み耽った本があるはずである。

『京都大学蔵大惣本目録』は、このような往時の貸本屋文化の一斑を伝える資料という意義を有しており、眺めていると種々の発見がある。

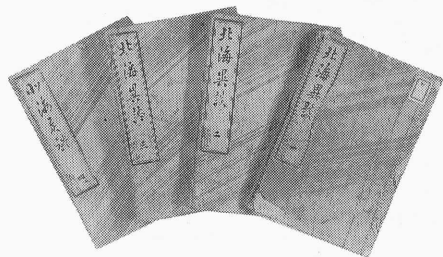
たとえば、もとになった『^{大惣}図書目録』では、近代書誌学以前の独特の分類によって書物を64部門に分っているが(その分類が大惣ですでになされていたものなのか、京大納入に際して納入業者が行なったものなのかは分らない)、諸部門のうちもっとも、それも飛び抜けて多くの書物を含むのは浄瑠璃丸本の部である(丸本は、特定の章段を抜き出した段物^{たんもの}に対して作品全体を収めた本をいう)。類似の部門である歌舞伎台帳も写本・版本を合せてかなり多い。京大蔵の大惣本は廃業時の大惣の全蔵書の2割強に過ぎないから、元来の大惣の蔵書構成においても浄瑠璃本がもっとも多かったかどうかは分らない。しかし、前述の東大図書館に現存する分を含めて、浄瑠璃本・歌舞伎台帳が非常に多かったことは間違いない。これはもちろんこれらの本の需要が多かったからに相違なく、近世の人々が、浄瑠璃や歌舞伎を、舞台上で演ぜられるのを見て楽しむだけではなく、読物としても、小説以上にといったいほど愛好していたことをうかがわせる(江戸や京大坂に比べてナマの舞台に接する機会の少なかった名古屋という土地柄を考慮する必要はあろう)。

次に多くの書物を含むのは、仏書の部である。仏教の影響が今日とは比較にならないほど大きかった時代ということを考慮に入れても、貸本屋から借りてまでも仏書を読もうとする人が多かったという近世の精神生活のありようは、やはり驚異ではあるまいか。

どの部門ということなく、写本が多いことにも興味が引かれる。一体、近世はすでに出版が企業として成立していた時代で、書物は版本が普通の形であったにもかかわらず、写本も中世までと同様に盛んに作られた。その理由は色々であって、『京都大学蔵大惣本目録』を見ているだけでも幾つかのことに気づく。一つだけ挙げると、出版すれば処罰されるような内容の書物を、貸本屋が写本として流布せしめるということがあった。それ

は、まず第一に徳川家や諸大名家の記録など御公儀・御政道にわたる事がらを扱った書物で、幕府写本という部門に多く収められている。「幕府写本」という部門名が実に直截で面白い。

そういう書物が、幕府写本に限られず、意外な部門にも潜んでいて、油断がならない。たとえば随筆写本追加という部門に『北海異談』という作品がある。これは文化年間に大坂で成立した破天荒な軍記講釈で、蝦夷地（北海道）を侵略したロ



シアに日本が立ち向い、函館沖の海戦で幕府と諸藩の連合艦隊がロシア艦隊を撃滅するという架空の戦争の顛末を書き綴る。『赤蝦夷風説考』などに見られるロシアの南下政策への当時の関心の、庶民レベルでの現れであろうが、それにしても驚倒すべき想像力で、作者の講釈師たちは世間を騒がせたかどにより獄門に処せられた。したがって、これはかなりヤバい書物のはずであるが、こういうものを何食わぬ顔で写本随筆などと称して貸し出すところに、大惚の、というより近世の貸本屋のしたたかな根性と、貸本屋文化の注目に値する役割があった。

書名検索の手段としてだけでなく、近世人の読書生活に内在する種々の問題を考える資料としても『京都大学蔵大惚本目録』が活用されることを、編集に関与した者として念じてやまない。

T S S オンライン目録検索の利用状況について

平成2年10月1日より“TSS オンライン目録検索サービス”の運用を開始してから3ヶ月が過ぎました。ここで、現在の利用状況と利用上の留意点についてお知らせいたします。

利用状況：12月末現在の利用申請者（登録者）は153名で、その部局別の内訳は「表1」のとおりです。また、1日を単位にアクセスした人数をカウントした利用数（同じユーザーIDでアクセスした場合、1日何回アクセスしても一人とみなす）は「表2」のとおりで、1日平均の利用者は約4名でありました。

利用上の留意点：（1）外字（非漢字の文字、記号）について；PC98系の端末（利用者の圧倒的多数が使用）等、TTY手順の端末では、通常附属図書館のホストコンピュータから、JIS以外の

文字（つまり外字）が転送されないので、外字は一切表示されず「：」に転換されます。ドイツ語のウムラウトのようなポピュラーなものも外字扱いとなり表示されないので、注意が必要です。

（2）通信ソフトについて；PC98系の端末用に、大型計算機センター提供の3種の通信用ソフトがありますが、「戸田版エミュレータ」以外のものは、図書館のホストとつないだ場合、漢字変換がうまくいかないもので、上記ソフトの使用をお勧めします。

なお、附属図書館のコンピュータ室では、「戸田版エミュレータ」のほかに、マッキントッシュ用の通信ソフトも用意し、希望者に配布しています。

（システム管理掛）

「表1」

T S S オンライン目録検索利用申請数

京都大学附属図書館
1990.12.31 現在

部	局	教・職員	院生・他	部	局	教・職員	院生・他
文	学 部	6		人 文 科 学 研 究 所		2	
教 育 学 部		1		原 子 エ ネ ル ギ ー 研 究 所		4	
法	学 部	4		食 糧 科 学 研 究 所		3	
経 済 学 部		1		基 礎 物 理 学 研 究 所		3	
理	学 部	23	18	経 済 研 究 所		1	
医	学 部	1		東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー		3	
薬	学 部	3	1	大 型 計 算 機 セ ン タ ー		1	
工	学 部	44	9	放 射 性 同 位 元 素 総 合 セ ン タ ー		1	
農	学 部	10	4	体 育 指 導 セ ン タ ー		1	
教 養 部		5		医 療 技 術 短 期 大 学 部		3	
化 学 研 究 所		1					
				合 計		121	32

「表2」

O P A C 利用者統計表（単位：人）

月 日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
10 月	—	0	2	1	1	3	—	6	4	—	4	3	1	—	2
11 月	6	6	—	—	4	4	2	3	5	1	—	2	4	5	8
12 月	3	—	7	6	7	7	4	2	—	4	9	4	5	5	1

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	合計
3	3	4	1	6	—	4	2	3	5	6	1	—	6	4	—	75
5	5	—	5	3	12	8	—	2	—	2	5	6	3	2	／	108
—	5	7	3	8	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	94

マルチメディアと図書館

大型計算機センター助教授 久 保 正 敏

情報処理技術の進展とともに、ニューメディアやマルチメディアと言った用語が市民権を得てきたが、ここで改めてその意味を振り返っておこう。メッセージの発信から伝達、受信、咀嚼までの過程を考えた場合、メッセージの表現形態、すなわち、文字・音声・音響・画像・映像などをメッセージ・メディアと呼ぶ。「マルチメディア」という文脈で使われるのはこれである。これに対し、CDやテレテキストなど、メッセージを通信・蓄積する媒体、さらにそれらを組み合わせたサービスが、「ニューメディア」の文脈で使われるメディアの意味である。

近年、画像や音響・音声の入力機器、CD-ROMや光ディスクなどの蓄積メディア、処理や検索結果をユーザに提示する出力機器、さらに、マルチウィンドウ、アイコン等の図的表示およびマウス、タッチパネル等の操作機器を組み合わせたユーザへの提示手法など、マルチメディアを扱うための処理技術や機器の進展はめざましい。最近の技術展などでは、動画（映像）をリアルタイムで入出力処理するための画像圧縮技術の実用化、CD-ROMを利用したパーソナルなマルチメディア処理環境などが重点的に取り上げられている。また、マルチメディア・データに関する標準化の動きも盛んである。

こうしたマルチメディア技術により、データベースの利用において新たな可能性が開けてきた。

まず第一に、原情報により近い情報へのアクセス可能性である。従来のデータベースにおいては、対象となる原情報が文字以外のメッセージ・メディアであっても、書誌的な2次情報にアクセスできるに過ぎなかったが、様々なメッセージ・メディアの扱いが容易となるにつれ、画像そのものをデータベース化した画像データベース、音響・音声を蓄積した音響データベースなどの実現が可能となってきた。文字情報についても、全文データ

ベース化だけではなく、筆跡や文字配列といった2次元情報が意味を持つ文書の画像データベース化など、原情報により近い情報へのアクセスが可能となっている。すなわち、データベースで扱える情報の次数が減少する方向である。

第二に、マルチメディア・データベースの横断的検索による高度な情報提供の可能性が生まれてきた。すなわち、ある特定テーマに関する情報を、文献、画像、映像、音響、などのマルチメディアによって提供する環境である。マルチメディアを有機的に関連付けて提供する仕掛けとしてハイパーメディアの概念が提唱され、CD-ROMと組み合わせた実現例が数多く見られる。あらかじめ仕組まれた百科事典的な情報提供の域にとどまっているこれらのシステムをさらに発展させ、ユーザの多様な検索要求を受けてマルチメディアを横断的に探索し、網羅的・総合的に提供できるような検索システムが実現できれば、データベースの利用価値が非常に高まる。

一般に情報検索の機能は、情報の「ハンティング」と「ブラウジング」に大別できる。前者は、検索すべき目的がはっきり認識されている場合に用いられる方法であり、目的情報への絞り込みが基本である。後者は、多くの情報を通覧しながら、付加的情報や関連情報を次々と得てゆくのである。

従来、図書館が提供してきたのは、ハンティング的な検索手段のみであった。上に挙げた二点の可能性を持ったマルチメディア・データベースが図書館の機能と結び付けられれば、ブラウジング的な情報検索手段を利用者に提供できるのである。このことは、図書館機能の質的飛躍につながるだろう。

しかしながら、現在はマルチメディア処理技術がようやく出揃ってきた段階に過ぎない。メディアの横断的検索を実現するためには、複数データベースの総合管理システムや、様々な用語や分類体系の差異を吸収できるようなシソーラスを組み

込んだ検索システム、さらに、ネットワーク環境における分散と統合のあり方、個人データベースと共用データベースの連携など、解決しなければならない多くの課題がある。

情報処理分野のスタッフと共同しながら図書館界のスタッフがこうした課題に取り組むことによって、新しい図書館の姿が生まれてくることが期待できるのである。

KUINS を利用した新しい図書館情報サービス計画の実験について

附属図書館では、本年度より運用が開始された京都大学統合情報通信システム（KUINS）を利用して、本学に所蔵する図書や雑誌の目録を、研究室等に設置された TSS 端末からオンラインで検索できるサービス（TSS オンライン目録検索サービス）をおこなっています（詳細は本誌 VOL. 27, NO. 2 参照）。図書についてはまだ最近の受入分に限られますが、このことによって研究者は附属図書館や最寄りの図書館（室）に行かなくても、研究室から直接、探している図書や雑誌の学内の所在を調査することができるようになりました。

しかしながら、これにより検索できる情報は、図書や雑誌のタイトル、著者、発行所、発行年及び所在に関する情報などの目録情報であり、資料の内容情報は含まれていません。研究者は、究極的にはこれらの内容情報を必要としており、そのためにはその資料を所蔵する図書館（室）に足を運ばなければならないのが現状です。

こうした状況の中で、資料の内容情報をデータベース化して、オンラインで利用者に提供しようという試みが、最近電子図書館構想などの形であらわれはじめています。また、身近な例としては、辞書などの CD-ROM を家庭で簡単に利用できる機器が販売されはじめています。

附属図書館でもこうした要求に対処するため、TSS オンライン目録で検索された資料の内容情報を、KUINS を利用して提供するシステムの検討を進めてきましたが、このたび本年度の「教育研究学内特別経費」で、新しい図書館情報サービスとして、画像情報処理によって資料の内容情報を提供する計画が認められました。

この計画は、附属図書館外国雑誌センター（理工学系）に受け入れる、約1,000種の学術雑誌の

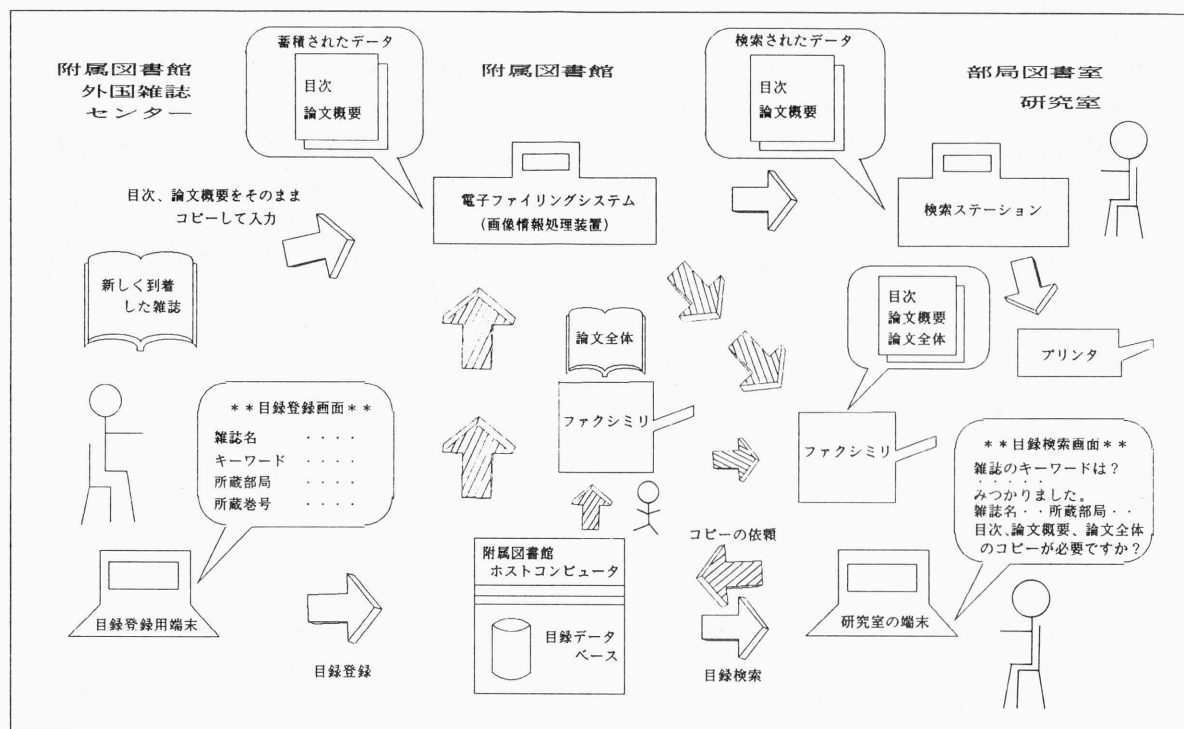
うちのいくつかを選択して、附属図書館に設置する画像処理可能な光ディスク装置に、新着雑誌の内容情報として目次と論文概要（おおむね論文の1項目にある）を、コピーと同様の方法で画像入力し、KUINS を介して、これらを雑誌の目録情報とともに検索できるようにすることを目的としたものです（こうした光ディスク装置を用いた文書の画像情報処理システムを、一般に「電子ファインディングシステム」と呼んでおり、官公庁や企業の文書整理に利用されている）。

当面、専用の検索端末装置を、遠隔キャンパスである宇治五研究所の共通図書室に設置して、新着雑誌の目次や論文概要の画像表示や印刷を行ない、前述の TSS オンライン目録検索サービスとの連動については、目録情報を、附属図書館のホストコンピュータに接続された研究室の TSS 端末で検索し、目次と論文概要を、最寄りの精度の高い G 4 ファクシミリに自動的に出力する計画です（通常の TSS 端末では出来ない）。また、論文全体が必要なときは、利用者のコピー依頼により、附属図書館から最寄りの G 4 ファクシミリに送付しますが、これは従来の文献複写と同じ作業となります（次頁参照）。

この実験が成功すれば、これを吉田地区内の図書室でも利用できるようにする計画であり、利用者は最寄りの図書室や研究室などで、附属図書館で受け入れる雑誌の目次や論文概要が閲覧できるようになります。

このシステムに入力すべき雑誌を選択するために、附属図書館では自然科学系部局を対象に、学内の図書室を通じて研究者の方々にアンケート調査を実施し、現在、調査結果の集計作業に入っています。（システム管理掛）

KUINS を利用したオンライン図書館情報サービス



秋季展示会「和漢書古典籍のさまざま」開催される

附属図書館では、平成2年11月27日から12月9日までの期間、本館展示ホールにおいて秋季展示会「和漢書古典籍のさまざま」を開催しました。

今回は附属図書館所蔵資料の中から、第一部としては重要文化財に対する理解と関心を深めていただきたく重要文化財指定図書进行展示、また第二部では、名家伝承本を中心とした貴重書と、奈良時代から江戸時代にかけてのさまざまな形態の和漢古典籍を展示しました。会期中、学内関係者ならびに学外から641名の方々の入場があり好評を得ました。

今後も附属図書館で所蔵する貴重な資料の展示を予定していますので、ご鑑賞して下さい。

CD-ROM に関するアンケート調査結果について

第4回国立大学図書館協議会シンポジウム（メ
インテーマ：CD-ROM を中心とした新しい図書
館資料（ニューメディア）の取り扱いと利用上
の諸問題）運営のため、東西両当番館（横浜国立
大学附属図書館・京都大学附属図書館）から全国
国立大学附属図書館を対象に「CD-ROM 等の整
備状況に関するアンケート」調査を行った。アン
ケートの目的・項目・集計結果の概要を報告しま
す。

調査目的：中央館および分館の CD-ROM 及び
関連機器の設置状況・利用状況等の
調査

調査時点：平成2年10月

調査対象：全国国立大学附属図書館（97大学）

回収率：100%

設置状況：設置大学 54大学 設置率：55.7%

1. 対応ハード（パソコン） 111台設置

端末機種別

PC-9801RX 系タイプ（NEC）が23台

Quarter-L 系タイプ（SONY）が19台

その他 69台

端末製造会社別

NEC 62台 55.9%

2. 対応ハード（CD-ドライブ）93台設置

PC-CD 102（NEC） 28台

CDR-1003S（Hitachi） 19台

Quarter-L（SONY） 15台

その他 41台

3. プリンターの種類 88台設置

HG 800（ESPON） 10台

PR 201G（NEC） 8台

その他 70台

所蔵 CD-ROM 出版物

純タイトル数

国内出版物 28タイトル 47.5%

海外出版物 31タイトル 52.5%

計 59タイトル

延べタイトル数

国内出版物 157タイトル 65.4%

海外出版物 83タイトル 34.6%

計 240タイトル

国内 CD-ROM では、学術雑誌総合目録（24）、
CD-WORD（18）、広辞苑（18）、J-BISK（16）、
海外 CD-ROM では MEDLINE（23）、EXCERPTA
MEDICA（9）、OED（6）が多く所蔵されている。
（（ ）内は所蔵数）

利用状況

利用時間帯（上位4位まで）

平日 52ヵ所で利用可能

9:00~17:00 18（34.6%）

9:00~20:00 12（23.1%）

9:00~19:00 3

9:00~21:00 3

土曜日 50ヵ所で利用可能

9:00~12:00 12（24.0%）

9:00~12:30 8（16.0%）

9:00~16:30 8

9:00~17:00 7

利用手続きの有無

必要 31（59.6%） 不必要 21（40.4%）

利用時間の制限

制限あり10（19.2%）制限なし42（80.8%）

制限している場合の利用可能時間数

30分以内 7（70%） 1時間以内 3（30%）

利用者マニュアルの有無

あり 45（86.5%） なし 7（13.5%）

自館作成のマニュアルの有無

あり 35（67.3%） なし 17（32.7%）

プリンターの利用制限等

条件付き制限なし 27（51.9%）

利用統計の実施の有無

実施 36（69.2%） 未実施 26（23.4%）

利用者用・業務用の別

利用者用 76(68.5%) 業務用 26(23.4%)
兼用 8(7.2%) 未定 1(0.9%)
その他
設備の充実等、今後の計画等についてつぎの
意見がよせられた。

機種を増設、CDソフトの種類の実、館
員教育の実施、利用者マニュアルの整備、
学内 LAN によるオンライン検索システム
を実施予定

以上

平成2年度 目録システム（地域）講習会を開催

学術情報センターの目録システムに精通し、目録・所在情報サービスの一層の促進を図るため、同センターと本学附属図書館との共催で近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）の大学図書館目録担当者を対象に、下記のとおりに3回に分けて開催しました。

記

期 間：第1日目 ： 平成2年8月28日

第2日目～： 平成2年9月4日～7日、9月18日～21日、10月2日～5日

会 場：京都大学附属図書館地域共同利用室

受講者：国公立大学図書館から 29名

なお、第1日目には、学術情報センターの講師から「目録システム概論」、「目録情報の基準」等についての講義があり、第2日目以降は本学図書館職員講師による検索実習、登録実習等が行われた。

以上

第4回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区）開催される

国立大学図書館協議会は、平成2年6月に熊本で第37回総会を開き、その中で「大学図書館とニューメディア：CD-ROMを中心に」をテーマに研究集会を行いました。その趣旨を周知させ、国立大学図書館における適切な対応の方法を検討するため、シンポジウムを東西二地区の会場で開催することとし、西地区では平成2年11月1日（木）と2日（金）の2日間、本館AVホールを会場として、41大学、46名が参加して、以下の日程で開催されました。

第1日目：11月1日（木）

講演 「大学図書館のネットワーク化とニューメディア」

京都大学教育学部助教授 原田 勝 氏

講演 「CD-ROMの構造と利用上の諸問題」

京都大学大型計算機センター教授 星野 聰 氏

第2日目：11月2日（金）

「利用できるCD-ROM資料について」

コメンテーター：山中 康行 氏（京都大学）

討議 「各種CD-ROMの利用方法」

第1会場：「Excerpta Medicaの利用方法」

コメンテーター：今井 義雄 氏（大阪大学）

第2会場：「電子広辞苑の利用方法」

コメンテーター：谷口 敏夫 氏（京都大学）

第3会場：「ERICの利用方法」

コメンテーター：山田 敦 氏（金沢大学）

なお第2日目には、本館展示ホールにおいて、国文学研究資料館より「岩波古典文学体系：源氏物語」、大日本印刷社より「MANDALA」、「災害写真集」及び三業者による各種CD-ROMのデモンストレーションがあり、シンポジウム参加者をはじめ、学内からも多数の見学がありました。

以上

「平成2年度大学図書館職員講習会」の開催

大学図書館の活動を促進するため、図書館業務の最新の知識及び専門的技術を中堅職員に修得させる講習会が、平成2年11月、文部省と京都大学附属図書館の共催で下記のとおり開催され、国公私立の85大学（等）から95名が受講しました。

記

「京都会場」：京都大学附属図書館 AVホール

第1日目：11月26日（月）

開講式、オリエンテーション：文部省、京都大学

講義「大学図書館の使命」西田龍雄（京都大学図書館長）

講義「学術情報システムと大学図書館」橋爪宏達（学術国際局学術調査官）

講義「学術情報センターのデータベースの形成と運用」根岸正光（学術情報センター教授）

第2日目：11月27日（火）

講義「学術情報センターの目録システムとそのサービス」井上 如（学術情報センター教授）

講義「中国文献のデータベース化」勝村哲也（京都大学東洋学文献センター助教授）

共同討議：テーマ「図書館における情報提供サービス」

見学：京都大学文学部博物館

第3日目：11月28日（水）

講義「外国雑誌センターの活動」緑田智晴（京都大学情報サービス課長）

講義「大学図書館業務電算化の実際」隅田雅夫（京都大学システム管理掛長）

講義「CD-ROMの図書館への導入」福留武士（大阪大学医学情報課長）

見学：京都大学附属図書館

第4日目：11月29日（木）

講義「紙の劣化とその対策」村上浩二（京都大学農学部教授）

講義「今日の著作権問題」藤原章夫（著作権課法規係長）

講義「参考業務の実際」山中康行（京都大学図書館専門員）

共同討議報告 「図書館の情報提供サービスについて」

閉講式 西田龍雄（京都大学図書館長）

以上

大学図書館職員長期研修に参加して：研修日記より

附属図書館情報管理課 平 元 みさえ

7月16日朝：図書館情報大学女子寮5階の一室でつくばでの初めての朝を迎えた。カーテンがないのと、鳥の声、そして若干の緊張とでいつになく早く目が覚めた。今日から3週間、講義・実習・見学、内容も大学図書館行政・健康管理／体育・データベース・情報処理……と盛りだくさんな「大学図書館職員長期研修（文部省）」が始まる。それにしても朝から暑い。長くて暑い3週間になりそう。

7月16日夜：講義終了後、初日恒例の懇親会が行われた。北海道から鹿児島まで全国の大学（国公私）から38名の図書館職員が参加しているが、今年は男女ほぼ半々で、例年になく女性が多いとのことだ。考えてみたら、図書館職員の構成は、大体、どこの大学でも女性が多いのだから、格別驚くことではない。数年がかりでやっと研修に参加できたという受講生がいる一方で、タイミングよく、順番がまわってきて27～8歳で参加した受講生もいる。大中小、国公私、自然系、人文系等々、様々な図書館から、利用部門、整理部門、システム関係等、様々な業務に関わる受講生が参加している。図情大の竹内図書館長がおっしゃるところの「人際」（人災ではない）を深める努力をなくては。

7月17日：今日の講義で印象に残ったのは第4講で、これからの図書館の方向を示唆するもので関心をもって聞くことができた。講義の主旨は、「大学の研究・教育活動に対する情報技術の影響がますます著しくなっている状況のもとで、図書館の位置づけと役割を再考する時期にきている。個々の図書館における業務の機械化を経て、現在は各種のネットワークの形成により、大学の枠を越えた情報活動が行われている。このような状況のもとで、図書館員によるデータベースの代行検索にかわり、利用者自身がデータベースのオ

ンライン検索を行い、CD-ROM版の検索を行う時代に移行しつつある。また、OPACやCD-ROM目録の普及にともない、利用者自身がみずからの手で、さまざまな情報源を探索し、必要な情報を取捨選択する機会が増加している。利用者自身の情報収集活動を側面から支援するのが図書館サービスの重要な要素である。そのために、図書館は、環境の整備、積極的なPR、利用指導の工夫等に力をいれなければならない。利用者のニーズを受けて行動することから一歩進めてニーズを掘り起こし、図書館は何ができるかを利用者知らせる努力が求められる。」ということであった。各図書館を個々にみていくと様々な状況にあるが、確かに、大学図書館全体の傾向は講師のお話の通りであろうと思う。京大の附属図書館においては、OPAC提供、CD-ROMの導入など徐々に環境整備はされつつある。その内容はまだまだ満足できる状況にはないが、今、何ができるかを利用者に応え、さらに利用者との相互作用の中で図書館活動をすすめていきたいものと思った。

7月22日：今日は、健康管理の講義と体育実習があった。健康管理の内容は、VDT作業が中心であった。ショックだったことは、40歳をこえると、眼の機能は徐々に低下する、それを防ぐ手だてはないということ、ということは、私の眼も深く静かに衰えつつあるのかしら……まあともかく、今日で1週間無事に終わった。

7月31日：今日の第1講の筑波大学のベッカー先生には驚かされた。15年前に京大附属図書館を利用された時のことが話題になり、いきなり、「今はそんなことはないでしょう、平元さん」と声をかけられた。話の内容もさることながら（「今は絶対そんなことはないはず」というもの）、名前をよばれたのには本当に驚いた。さらに講義をすすめる中で、その時その時の話題に応じて、その

人を見ながら受講生の名前を呼ばれた。そういえば、先生は、昨日、受講生席の後方で講義を聞いておられた。その時に覚えられたのだろうか。受講生一同ただただ感心するのみ。

8月2日：今日の午後は、4班にわかれての共同研究討議が行われた。あらかじめ準備された各人の発言要旨をみても、今日の討議からも、それぞれいろいろな問題をかかえて業務に取り組んでいることがわかる。ほぼ共通してあげられていたのが、「予算と人員」の不足である。「人」の問題で

は、特にシステムまわりを担当している方々の、要員の確保を望む声は切実であった。限られた「予算と人員」とよりよい図書館サービスをどうバランスさせるか、難しい問題である。

明日でこの研修が終わる。受講生全員、病気、怪我なしで修了式を迎えられそうだ。第1日目の懇親会を初めとして、見学先でのいくつかの懇親会、寮での交流などなど、昼の研修にくわえて、夜の研修も充実していた。この研修に気持よく送り出して下さった職場の皆さん、どうもありがとう。来週から、職場に戻って仕事にがんばらなくては。

「平成2年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）」の開催

大学図書館、公共図書館、その他の図書館施設等において、漢籍の整理等の業務に従事する図書館職員に、学情報システムの環境整備の一環として、漢籍ならびに中国の文献目録を電算処理することに関する基本的な知識と技術の普及に重点をおく講習会で、文部省と人文科学研究所附属東洋学文献センターの共催で毎年開催される。本年度は下記のとおり開催され、国公私立大学17校、公共図書館5館、から合計24名が受講した。

記

第1日：10月1日（月）

開講式、オリエンテーション：人文科学研究所附属東洋学文献センター長

講演「人文科学とデータベース」星野聰（大型計算機センター教授）

講義「東洋学文献類目の編纂とフォーマット」都築澄子（東洋学文献センター事務官）

講義「東洋学文献類目の計算機処理」河野典（大型計算機センター技官）

講義「東洋学文献類目と漢籍目録の電算処理」勝村哲也（東洋学文献センター助教授）

第2日：10月2日（火）

講義「漢字入力に便利な三角編号法」松村哲也（東洋学文献センター助教授）

講義「計算機処理入門」隅元栄子（大計算機センター技官）

講義「データベースについて」川原稔（大計算機センター助手）

見学 大計算機センター

実習 データベース検索（1）

第3日：10月3日（水）

講義「知識情報処理」石橋勇人（大計算機センター助手）

講義「マルチメディアと言語処理」久保正敏（大計算機センター助教授）

実習 データベース検索（2）

第4日：10月4日（木）

講義「UNIXと情報検索」安岡孝一（大計算機センター助手）

講義「漢字コードの話」小澤義明（大計算機センター技官）

実習 データベース検索（3）

第5日：10月5日（金）

講義「大学間ネットワークサービス」櫻井恒正（大計算機センター技官）

講義「情報ネットワーク」金澤正憲（大計算機センター助教授）

質疑応答

閉講式：人文科学研究所附属東洋学文献センター長

受講者から寄せられた主な感想は次のとおりである。

1. 自館の電算化を考えた上で参考になり、有意義な講習会であった。
2. 人文科学における JIS 漢字の範囲を越えた漢字処理を実践しているデータベースにふれて、大変参考になった。
3. 将来における人文関係の古典や参考図書の電算化、特に CD-ROM 化に興味をもてるようになった。
4. 漢字の電算処理に関する講義は参考になった。
5. CHINA3 をはじめとするデータベースを実際に検索できたのでよかった。
6. 実習に割り当てられた端末をもっと増やしてほしい。

（人文科学研究所附属東洋学文献センター）

「平成2年度漢籍担当職員講習会（中級）」の開催

大学図書館、公共図書館、その他の図書館施設等において、漢籍の整理等の業務に従事する図書館職員に、漢籍の取り扱いに関する知識と技術を普及し、学術資料としての漢籍の有効な利用体制の整備に資することを目的とした講習会である。中級は4年に一度開催される。この講習会は、文部省と人文科学研究所附属東洋学文献センターの共催で開催されるもので初級修了程度の漢籍知識を有する者を対象としている。

本年度は下記のとおり開催され、国公立大学11校、公共図書館4館、から合計20名が受講した。

記

第1日：11月26日（月）

開講式、オリエンテーション：文部省、人文科学研究所附属東洋学文献センター長

講演・ 「漢籍一般」 梅原郁（人文科学研究所教授）

講演・実習 「史部書」 礪波護（人文科学研究所教授）

第2日：11月27日（火）

講演・実習 「経部書」 小南一郎（人文科学研究所教授）

講演・実習 「子部書・敦煌」 高田時雄（人文科学研究所助教授）

第3日：11月28日（水）

講演・実習 「集部書」 荒井健（人文科学研究所教授）

見学・ 附属図書館

第4日：11月29日（木）

講演・実習 「叢書」 勝村哲也（人文科学研究所教授附属東洋学文献センター助教授）

講演・ 「蔵書家」 井波陵一（滋賀大学助教授）

第5日：11月30日（金）

講演・実習 「朝鮮本」 藤本幸夫（富山大学教授）

第6日：12月1日（土）

質疑応答

閉講式：人文科学研究所教授附属東洋学文献センター長

受講者から寄せられた主な感想は次のとおりである。

1. 漢籍を扱う際、たんに整理上の技術的な処理だけが問題になるのではなく、中国における書物というのは一体なんであるか、といった問題が大変重要であると思う。従って今回漢籍に対する基礎的な知識を教えていただいた事は大変有意義であったと考える。
2. 中国の文化伝統の重みと共に、漢籍というものを扱う際の困難さをも改めて感じさせられた。
3. 漢籍全体に対する知識を深め整理することができた。また実務に対して参考になるような内容も多かった。
4. 講義は面白く、また仕事に対する刺激を与えてくれた。

（人文科学研究所附属東洋学文献センター）

CD-ROM の利用方法の一部変更

8月下旬より、CD-ROM 出版物によるサービスを開始しました。（静脩1990年10月 Vol.27, No.2）

今までの利用方法には利用上の問題があったので、これを解消するためにチェンジャーを2個購入し、

チェンジャー1：〔日本語対応 端末機使用〕

朝日新聞全文記事情報、学術雑誌総合目録、国文学研究資料館蔵 マイクロ資料目録

AURORA on CD-ROM （青山学院大学蔵書目録）

チェンジャー2：〔外国語対応（アルファベット）端末機使用〕

Book in Print Plus, Ulrich's Plus.

をセットし、下記の時間帯はいつでも機械が立ち上がっている状態にしました。利用者は次の時間内ならば何時でも、自由に、手続きもなく利用できます。

記

（平日）9：00～12：00. 13：00～17：00. （土曜日）9：00～12：00

但し、「広辞苑」はチェンジャー1に、はいらないので利用者は従来どおりの手続きが必要です。

（参考調査掛）

京都大学附属図書館報「静脩」 Vol. 27, No. 3（通巻99号）1991年1月31日発行・編集：静脩編集委員会
（責任者 附属図書館事務部長） 発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・☎075-753-2613